

---

# マリアナの 幸 不幸

幻夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マリアナの 幸 不幸

### 【Nコード】

N1705V

### 【作者名】

幻 夢

### 【あらすじ】

マリアナ…それが私の名前。 マリアと言う聖人様の名前が入っている、私の名前。 正直言って私はこの名前が好きじゃない。あの子が言っていた「なんていうかさあ…マリアナって名前あなたに似合わないよねえー！」と、でも言い返すことが出来なかった。

だって彼女が言っていることは間違っていないから、私はきっと名前負けしていると思うから……。 孤児院で暮らしている少女マリアナ、彼女は森に捨てられていたのを孤児院の神父様に拾ってもらった…。

世界は地球ではないのですが、マリアと言う名前はこの世界でも聖人と言う設定になっています。更新はゆっくりです。



てくれた人だ。

この孤児院は、町から少し離れた森の中にある教会でやっている。

私は少しでも役に立ちたくて、毎日朝洗濯物を洗っている。

本当はやらなくていいと神父様は言っていたけど、無理を言っ  
て毎日洗濯をしている。

洗濯が終わり教会に入ると、そこにはすでに何人か子供たちが起  
きてきていた。

「おはよう…」

まだ眠気が取れていない、私より2歳年下の少女が挨拶してくる。

「おはよう」

私はその子や他の子に挨拶をする。

「おはようございますマリアナ」

微笑みながら神父様が声をかける。

「おはようございます神父様」

私も少し微笑んで返すが、フードで隠れて表情は見えないだろう。

マリアナは私の名前、私を拾ってくれた神父様が付けてくれた。

でも私はこの名前が嫌い、神父様はぴったりだなんていつてくれているけれど、ぜんぜん私には似合わないから。

マリアナのマリアは聖人様の名前だ。

「すまないな、今日も洗濯をしてもらってしまっ…」

神父様はすまなそうな顔をして誤っている。

「いえ好きでやらせて頂いているのですから、気にしないでください」

「そうですか…」

いつもと同じ受け答えを、今日も私たちはしていた。

孤児院の中マリアナは、神父様に別れを告げる。

他の子供たちは皆遊びに言っている。

この孤児院は、16歳になると出なければいけない。

なかにはここに残って仕事をする人を選ぶ人もいる。

神父様は悲しそうな、少しさびしそうな顔をしていた。

「まだあなたは16になっていないのですからまだ此処に居てもいいですよ...」

「神父様私はまだ15ですが、もっと広い世界を見て回りたいんです」

マリアナの目は、本気だった。

「そうですか：わかりました、つらい事があつたらいつでも相談しに来てください。いつだって此処はあなたの居場所です」

とてもきれいな笑みで彼女は、ありがとうといった。

そうして彼女は神父様に別れを告げて孤児院を出た。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

この国では、16で成人だがこの国でも実力さえあれば、ギルドなどで未成年も仕事ができる。

孤児院を出ることをいったとき神父様は、私のことを心配していた。

なぜなら私が成人もしてない子供で異形だから。

子供で異形な私はきつと、とても一人で生きていくのは大変だから。

嬉しかった、神父様が居場所はこちらにあるとってくれた事が。

ずっと不安だったから、自分には居場所がどこにもないような気がして。

どんなに辛くても私はがんばっていける。

此処を出る事はもうずっと前から決めていた、それに私には帰る



場所がある。

マリアナが孤児院を出て5時間ほど経った時、ようやく町が見えてきた。

「とまれ」

町の入り口にある門をとつろつとした時、警備兵に止められる。

フードで顔を隠していて、怪しいと思わないものは居ないだろう。

だが神父様がもしもとめられたときはこういえと言われてる。

9

「エルドの知り合いです」

「そうか…もう言っていていいぞ」

エルドは神父様の名前だ。

マリアナは門をくぐりルーレの城下町に入る。

マリアナはフードを被っていて怪しいが、幸い城下町にはお忍びで来る人など、他にもフードを被っている人がいるのでそこまで目立つことはなかった。

「取りあえず宿屋を探して今日はもう寝よう…。」

少し歩いて回ると、宿が見つかったので今日はここに泊まることにした。

カランカラン……

「いらっしやい泊まっていくかい？」

「はい5日ほど泊めてください」

「それじゃ銀貨6枚だよ」

お金を渡して鍵を受け取る。

この世界でのお金は、銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨100枚で金貨1枚、金貨100枚で聖貨1枚だ。

金貨はたまに見かけるが聖貨は、ぜんぜん見かけない。

マリアナは明日のことを考えながら、眠りについた。

### 3 (後書き)

お金の単位は銅貨1枚が100円です。

私は今真っ白な空間にいる、多分夢の中だと思う。

目の前にはまぶしくてよく見えないが、女の人が立っていた。

此処には2人しか居ない、ふと気になって声をかける。

「こんにちは私はリアナあなたは？」

リアナという名前を変えて、私はリアナとこれから名乗ることになっているので、リアナと名乗った。

「私は……よ……」

いつも名前がうまく聞き取れない。

「リアナ…私は…よ……」

だんだん景色が薄れていく、もうすぐ目が覚めるんだろう。

目が覚めて見回すと、とまっている宿屋の部屋に居た。

たまに見る不思議な夢を今日も見た、あの人は誰だろう。

とても優しい声をした女の人…。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

今日は町にあるギルドに登録しに行くことにした。

時間があるので、その前にまずご飯を食べる事にした。

此処の食堂え向かうと、料理のメニューが書いてある紙が机に張ってある。

私はトマトパスタと旬のサラダにした。

食堂においてある時計を見ると、そろそろ時間なのでギルドに向かうことにした。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

「此処がギルド……」

中に入ってみるとたくさんの方が居て、エルフや亜人がすこしいた。

「あのすいませんギルドに登録したいのですが」

「わかりました、いくつか質問に答えていただきますね」

係りの人は、メモを出して質問を始める。

「名前と年齢と職業を聞かせてもらえますか？」

「私の名前は、リアナです。年齢は15で職業は……」

私が迷っていることにきずいた係りの人は、説明をしてくれる。

「職業というのは、魔術師、精霊師、剣士などがあります。職業を決めておくとそれにあつた依頼が紹介されることがあります。もし決まっていなかったら、特には答えなくてもかまいませんよ」

「ありがとうございますじゃあとくには決めてないので……」

質問に答え終わり、登録が終わるとカードを渡された。

カードがあれば前みたいに、町に入る時とめられることが少なくなる。

私の今のランクは、Fだ。

ランクは下から、F、E、D、C、B、A、Sの7つがある。

Sは今のところ、2人しかいないらしい。

取りあえずランクごとに受けられる依頼が決まっているので、Fランクの前に行き簡単な以来を探す、

「これにしよう」

とりあえず、まずはきのこの採取の依頼を受けることにした。



「29…」

マリアナは普通なら見分けるのにすごく時間があるようなきのこの種類を、必要なものだけ迷わず採っていく。

今居るのは町の近くのウタの森といって、あまり魔物が出ないが時々ものすごく強い魔物が現れる所だ。

静かな森の中突然生き物の気配を感じた。

さつきから数人が森の中にいたのは知っていたが、少し不陰気が違う。

「ヒーツツ！化け物だ！！」

近くから声が上がったのでそちらを向くと、逃げ出す脂ぎった男が見える。

それと一人の少年とおそらく化け物と言われた魔物が居た。

少年は魔物の前で剣を構えて、必死に倒そうとしている。

だがこのままだときつと少年は負ける。

マリアナは短剣を手にかまえて一瞬で魔物を倒した。

「ギヤアアアツ」

そして少年に振り返り手を差し出す。

「大丈夫？」

少年はとても困惑した顔をしながら、倒された魔物を見つめている。

「え、あ…あなたは…」

やっとこちらにきずいたのか少年はこちらを見る、しかし恐怖した目で。

マリアナは魔物から100mくらい離れて居たのに、0.1秒も経たぬうちにすでに魔物を倒してしまったのだから…。

少年から見たら、一瞬で何かが現れて魔物を倒したように見えるだろう、だからとても少年は混乱していた。

手をさしのべてくれたマリアナは、助けてくれたのかもしいれないが、フードを深く被っていたせいで怪しく少年の目には映った。

「助けてくれてありがとうございます……」

やっと落ち着いたのか少年は礼を言うてくる。

少年は栗色をした髪に、すきとつるような緑の目をした、14ぐら  
いに見えるかわいい系の男の子だ。

「どういたしました…じゃあね」

少年が大丈夫そうなので、マリアナはその場を離れる。

「あ、待ってください！！あの…ルーレの町までの道を教えてもら  
えませんか？」

少年には、さっきのような恐怖の表情はもうしておらず、申し訳な  
さそうな顔をしていた。

「いいよ私も今から向かうところだから」

「ありがとうございます…あの、名前を聞いてもいいですか？」

きらきらとした目でマリアナを少年は見つめる。

「え…ああ私はリアナっていうのあなたは？」

少年は若干とまどったあと口を開いた。

「僕はリュアっていいいます」

リュアはそういって笑顔になる。

「じゃあリュア、少しの間よろしくね」

そうして2人は町えと歩き出した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1705v/>

---

マリアナの 幸 不幸

2011年7月26日08時27分発行